

# Kalaymyoオフィオライトカンラン岩の構造岩石学的研究

## Structural petrology of peridotites from the Kalaymyo ophiolite

\*浅野 航平<sup>1,2</sup>、道林 克禎<sup>1</sup>、Jung-Woo Park<sup>3</sup>

\*Kouhei Asano<sup>1,2</sup>, Katsuyoshi Michibayashi<sup>1</sup>, Jung-Woo Park<sup>3</sup>

1. 名古屋大学大学院環境学研究科、2. 静岡大学、3. ソウル大学校

1. Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, 2. Shizuoka University, 3. Seoul National University

Kalaymyoオフィオライトはミャンマーに位置している。Kalaymyoオフィオライトは大規模なカンラン岩体を有し、そこではカンラン岩は一般的に新鮮である。近年、Kalaymyoカンラン岩において岩石学的、地球化学的手法による研究が行われており、それらの結果によるとKalaymyoカンラン岩はメルトー岩石反応を経験している。本研究では掘削コアと露頭で採取された試料、全14試料のカンラン石の結晶方位解析とカンラン石とスピネルの主要元素組成分析を行った。本研究の試料は粗粒で等粒状の組織を示した。カンラン石とスピネルの主要元素組成はOSMAの領域にプロットされることから、本研究の試料は部分熔融後の上部マントルの溶け残り岩であることが示される。またCr#が0.3より高いスピネルはTiO<sub>2</sub>含有量が比較的高い(0.10-0.20 wt.%)。Tiは不適合元素であるので、高いTiO<sub>2</sub>含有量はカンラン岩がメルトー岩石反応を経験した指標になる。本研究の試料ではJ-indexとスピネルのCr#の間に正の相関が見られた。この相関は2つのトレンドを示す。ひとつはスピネルのCr#の増加に対してJ-indexが強く増加するもので、もうひとつはJ-indexの増加が弱いものである。メルトー岩石反応を経験した試料はJ-indexの増加が弱いトレンドに属す。したがって、メルトー岩石反応によるメルトの浸透は変形、特にCPOの発達に影響を与えらる。またメルトー岩石反応は変形と同時に生じたと考えられる。メルトー岩石反応を経験した試料は採取された標高に関して狭い範囲に集中することから、Kalaymyoオフィオライトでのメルトー岩石反応は局所的であったことが考えられる。

キーワード：Kalaymyoオフィオライト、カンラン岩、メルトー岩石反応、J-index

Keywords: Kalaymyo ophiolite, peridotite, melt-rock interaction, J-index